
英雄譚 名も亡き墓標

アマネ・リィラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄譚 名も亡き墓標

【Nコード】

N9950Z

【作者名】

アマネ・リイラ

【あらすじ】

とある極東の島国で起こったクーデター事件。それを引き金とし、世界は大戦へと歩を進めた。

世界中を巻き込んだ戦争。その中では多くの命が失われ、哀しみを生み、絶望を生んだ。

その結果として、シベリア連邦 その国は、敗戦した。それにより、敗北したシベリア連邦は欧州連合による統治という名目の支配を受けることとなる。

かつての繁栄から一転、灰色の空に閉ざされた暗雲とした国となっ

てしまったシベリア連邦。誰もが俯くその支配が始まってから、二年の月日が経っていた。
その最中、人々の希望となった存在がある。

義賊集団 《氷狼》。

苦しむ人々のため、統治軍に抗う義賊集団だ。
そこに所属する一人の青年……護・アストラード。彼は、戦時下で
交わした小さな約束のために戦い抜いていく。

これは……世界の歴史に刻まれる、長い長い戦いを紡ぐ物語。

掲げたものは、約束。

懸けたものは、命。

英雄とは、誰のために生まれるのか。

何のために存在するのか。

ただ、約束を交わした二人の男女は、その命を懸けて戦い抜く。

「あの日掴めなかった手を、今度こそ俺は、掴んでみせる！！」

プロローグ

静かな夜だった。敵国の軍隊に囲まれているのが、まるで嘘だと感じる程に。

「……わたしたち、どう、なるのかな……？」

不意に、隣から声が聞こえた。そうだな、と、青年は呟く。

「歴史的に見ても、首都を包囲されてから盛り返したなんてふざけた事実はない。……まあ、敗戦だろうな」

敗戦　その言葉を受け、隣の少女は固まったようだった。青年は、ふん、と鼻を鳴らす。

「そもそも、無理があつたんだよ。大日本帝国と合衆国アメリカだぞ？　勝てるわけがねえ。EUも向こうについちゃったしな」

忌々しげに吐き捨てる。本当に、この国の上層部はどうかしている。

勝てるはずがない戦争を、どうして、こんなことになるまで

……

「　　」

聞こえたのは吐息だった。見ると、青年の隣で少女が肩を抱き、震えている。

大丈夫か　出かかった言葉を、青年は呑み込んだ。

……大丈夫なわけがない。

今、自分たちは戦争をしていて、敗北を目の前にしている。そして、負けるにしても戦わなければならない。その結果、死ぬことさえあり得る。

それがどういう意味を持つのか……それに対する詳しい説明は、必要ないだろう。

無意味に、殺される。

ただ、それだけのことだ。

敗北が決められた戦いで、青年たちは戦うことを強要されている。希望さえないままに。

どれほど、理不尽だというのが。

……理不尽。浮かんだその言葉に、青年は唇を噛み締めた。
そして。

「大丈夫だ」

青年は、きつぱりと。

断言するように、先程呑み込んだ言葉を、今度こそ紡いだ。

「死なせない。死なせてたまるか」

それがどんな感情から発せられた言葉だったのか、青年にはわからない。

ただ、彼は。

少女に、理不尽に屈して欲しくなかった。

「絶対に、死なせやしない。だから、さ、もっと　　そうだな、楽しいこと、考えよう」

「楽しい、こと?」

「ああ。……戦争が終わったら、何がしたい?」

問いかけに対し少女は目を伏せ、少し悩む。そして、それなら、と口を開いた。

「色々な所へ行きたい。わたし、この国しか……ううん、この街しか知らないから」

「いいな、それ。俺も一緒に行つていいか?」

「もちろん」

少女は微笑む。人付き合いの苦手な青年と、人見知りして引つ込み思案な少女。

互いに人と距離を取ってしまう性格だからこそ打ち解けられた二人は、そうして、約束を交わした。

「平和になったら、いいね」

「ああ。本当にな」

青年は呟く。こんなくだらない争いなどすぐに終わって、平和になればどれだけいいだろうか。

隣にいる少女など、銃を握るよりも花を愛でているほうが余程似合うだろうに。

青年は、微笑みと共に問いかける。

「平和になったら、どこへ行きたい?」

「そうだね……えっと、じゃあ　　」

微笑み。それと共に、少女が言葉を紡ごうとした瞬間。

全てを掻き消すような警報が、響き渡った。

少女の、未来を望むための言葉は。
無情にも、打ち砕かれる。

『敵襲！！ 敵襲 ツ！！』

叫び声。青年と少女は、ほとんど同時に外を見た。

目に映ったのは、紅蓮。
人の形をしながら、人に非ざる鋼鉄の体を持つ巨体。

古代遺産 ? 神将騎？

「 ツ！？ 」

青年が叫ぶ。同時、二人が立つ足場が大きく揺れた。

視界が揺れる。その中で、青年は見た。敵の神将騎が持つ巨大な銃より放たれた一撃が、城壁を粉碎しているのを。

傾く足場。青年は、反射的に手を伸ばす。

怯えた様子の少女へ。

ただ、手を ……

あの日、届かなかった手が。
届けられなかった手が。

世界に抗う、理由となった。

プロローグ（後書き）

というわけで、お待たせしましたプロローグです。
続いたの第一話もお楽しみいただけると幸いです。

第一話 氷狼 フェンリル

仰向けに倒れた状態から、空を見上げた。灰色の空。降り出した雪が、視界をまばらに白く染め上げていく。

聞こえてくるのは、勝鬨を上げる声。負けたのだな、と、他人事のように思った。

手を伸ばす。

何かを掴もうとするかのように。

青年は 手を伸ばした。

しかし、その手は何も掴めない。

ただただ、冷たい空気に触れるだけ。

城壁の上から落下したために、体は負傷していた。足の感覚がない。くつついてはいるようだが、負傷しているらしい。上手く動かない。

だが、そんなことよりも。

伸ばした手が掴めなかったもの。

理不尽に奪い去られたもの。

それが、何よりも ……

「おい、見るよ」

声が聞こえた。視線を巡らせると、そこにいたのは敵国の
E
U軍の兵士たち。彼らは笑みを浮かべ、こちらを見ている。

「生き残りだぜ。殺しとくか？」

「そーだな、女だったら良かったんだけどな」

「男なんていらねえしな」

そこにいた三人の兵士は好き勝手にそんなことを口にすると、銃口をこちらへと向けてきた。

銃口。見慣れたものだ。青年は、ほっ、と息を漏らし。

銃声と鮮血が、積もり始めた雪の大地を彩った。

地面に死体が転がる。正確に額が撃ち抜かれて転がっているそれらの傍へと青年は歩み寄る。その表情は、人殺しを何とも思っていない者のそれだった。

戦争という現実が。

僅か、齢十八という若さの青年を人殺しへと変えてしまっていた。

「……生き延びるんだ」

兵たちから装備を奪い、外套を身に纏うと、青年は呟いた。

銃を杖に。敵国の軍隊が勝利に沸く、彼にとっての故郷に背を向けて。

「必ず 俺は」

理不尽に対する怒りと。

自身の不甲斐なさに対する怒りを携えて。

氷の世界の狼、その戦いが始まった。

電子音が鳴り響く。コックピット内に響き渡るその音を耳にし、
青年 護・アストラードはゆっくりと目を開けた。そうしてから
彼は、コックピット内に備え付けられた無線を操作し、外部に繋ぐ。

「こちら、一番」

意識を起こしながらそう言葉を紡ぐと、ザザツ、というノイズが
耳に届いた。次いで、相手の声が聞こえる。

『こちら二番。ゆっくりと休めたか？』

「正直、万全とはいかねえけどな」

『それは、お互い様だ』

苦笑のようなものが聞こえた。だが、その通りだ。この状況下、
辛い者などいない。全員が無理を押ししているのだ。

それを内心で確認し、護は言葉を作った。

「……今回の作戦が成功すれば状況がかなり改善されるんだろ？」
『俺たちの、じゃなくて国民の、って条件が付くがな。まあ、いよ
いよ相手もこつちを無視できなくなるはずだ』

真剣な声色。護は、そうか、と頷いた。

この戦いを始めてから一年以上……随分、遠いところまで来たよ
うに思う。

自身が駆る相棒と共に、仲間と共に、よく、ここまで。

「本当に、随分遠くまで来たもんだよな」

『確かに。だが、いきなりどうした？ らしくない』

「……夢を見た」

護は、呟くように、そう応じた。

「二年前の夢だ。俺が戦うと決めた日を、夢に見た」

護は、真つ黒な視界に向けて手を伸ばした。

ゆつくりと、握り締める。だが、やはりその手は何一つとして掴めない。

『そうか。……だが、思い出に浸るのも程々にしておけ。いつもの通り、お前が失敗すれば俺たちは全滅だ。わかっているな？』

「当たり前だろ。安心しろ、レオン。俺は負けねえ」

相手の名を呼ぶ。すると、レオン、と護が呼んだ相手が苦笑を漏らす気配を感じた。

『名を呼ぶな。番号呼称の意味がないだろう？』

「つと、悪い」

『いや、構わん。それでは、な。十分後に作戦開始だ。お互い、最善の結果を』

「ああ。死ぬなよ？」

『お前もな』

ザッツ、というノイズが走り、通信が途絶える。護は一度目を閉じると、大きく息を吐いた。

戦いが始まる。伸ばした手で、今度こそ掴み取るための戦いが。

「まだ、そこにいんのか？」

浮かぶのは、少女の微笑。

約束を交わし、しかし、それが果たせなかった相手。

あの少女と、再び会うために。

「……行くか、 フェンリル」

ウン、という音と共に、コックピット内の空気が僅かに揺れた。

黒一色だった世界に明かりが灯り、護の姿が浮かび上がる。

漆黒の髪と、碧眼。シベリア人としての特徴より、もう一つの血のほづの面影が濃い容姿。

鋭い光を宿すその瞳を、護は巡らせる。

「エネルギー残量、76%……まあ、こんなもんだろ。起動予測時間は一時間と少し……戦闘なら半分か。けど、そんだけ動けんなら十分だ」

そして、彼は時を待つ。

作戦開始のその時を。

そして。

その時が、訪れる。

響く爆発音。護は両の手に力を込め、大きく吠えた。

「 行動開始だ！！ 行くぞッ！！」

カルリーネ・シュトレンは、苛立ちを抑えるために深夜、外へ出ていた。彼女は、ふん、と吐き捨てるように鼻を鳴らすと、忌々しげに呟いた。

「何が？奏者？だ……ただのパーツ風情が、偉そうに」

統治軍 敗戦国であるシベリア連邦の治安維持のためにEUより派遣された軍隊の、茶色を基調とした制服を身に纏う彼女は、額に皺を寄せ、基地の中心にある司令部を睨み付けるように見据えた。そこには、彼女が最も嫌うタイプの人種 大した実力もないくせに、『？奏者？だから』という理由だけで踏ん返り返っている人間がいる。

確かにあの男は二年前の世界大戦で活躍したのだろうが、それは？神将騎？という現代最強の兵器にして、黎明の時代に生み出された古代遺産の力があってこそだ。あの男自体は、ただただ選ばれただけに過ぎない。

だというのに。

「私の忠告を、無能の身で笑って退けるなど……愚かな」

言っつて、カルリーネは空を見上げた。漆黒の空。星どころか、月さえも見えない。

大戦の影響だと、カルリーネは思った。ここ二年、シベリアの空が晴天を見せたことがない。元々からして厳しい気候の地域であったが、やはり、ここで行われた戦いが効いているのだろう。

世界大戦。

ここ二年で、かつての戦争のことをそう呼称するようになった。極東の島国 閉鎖された国で起こったクーデターをきっかけに、あらゆる世界を巻き込んだ大戦争だ。

カルリーネの祖国、『千年ドイツ大帝國』も戦争に巻き込まれた。彼女は伝統ある貴族の責務として兵を率いて参戦し、同時期に欧州連合ヨーロッパ・ユニオン、通称EUの兵士として戦い、そしてEUはシベリア連邦に勝利した。

無論、その勝利自体はEUのみのもではなかったが、様々な事情が絡んだ結果、シベリア連邦はEU軍 改め、統治軍が治安維持という名目の下、暫定統治を行っている。

……もつとも、植民地支配に近いがな……。

小さく、確認の意味も込めてカルリーネは呟いた。だが、それは当然だ。シベリアは敗戦国であり、EUは戦勝国だ。敗戦国の末路は、歴史が示している。

「だが、それに従わない者もいる。それを何故、理解しない？」

再び、彼女は司令部を睨み付けた。だが、それで何かが変わるわけでもない。カルリーネはふう、と息を吐くと、通信機を取り出した。そして、彼女の部下へと電話をかけようとする前に

「貴様、そこで何をしている？」

不意にカルリーネの視線が、二つの人影を捉えた。

軍服を着ておらず、作業衣を着た男女だ。二人はびくりと体を震わせると、こちらへと敬礼を返してきた。そして、男の方が言葉を紡ぐ。

「はっ、戦車の整備を行いに」

「整備？ その割には、何も持っていないようだが」

「はっ、足りないパーツがありましたので、今からそれを倉庫へ取りに行く途中であります」

リストです、と男がこちらに歩いてきて手に持っていたバインダ―を手渡す。女の方はこちらへ敬礼をしたままだ。帽子のせいで顔が伺えないが、まあ、カルリーネに興味はない。

カルリーネはリストを確認すると、ふむ、と頷いた。特におかしなところはない。整備の前に用意していなかったのは整備班の不備であろうが、それは別に罰するほどのことではない。そもそも、彼女はこの基地の担当ではないのだ。罰する道理もない。

「了解した。すまない、呼び止めた」

「いえ。では、失礼します」

敬礼。それと共に、男は去っていく。カルリーネはその背を見送つてから、改めて通信機を手に取った。ザザツ、というノイズが走つた後、通信が繋がる。

「ヤナギ。車の用意を。帰還する」

『任務は済んだのですか？』

無線から返ってきたのは問いかけだった。カルリーネは、首を左右に振る。

「忠告はしたが、受け入れなかった」

『成程、ですが、良いので？ 別に今夜くらいはここで過してもいいや。ここが碌な対策も取らないことがわかった以上、すぐに上』

へ進言する必要がある。同時に、首都の防備を固めなければなら
ない」

『……了解』

領きが伝わってくる。カルリーネは歩き出した。長居をする意味
はない。特に、ここへは大した人員も連れてきていないのだ。自分
本来の居場所へ急ぐべきだろう。

そうして、ドイツの貴族軍人が立ち去ってからしばらく後。

この基地が 戦場になった。

最初に異変に気付いたのは、巡回中の警備兵だった。巡回といっ
ても、まず襲撃など考える必要のない基地の見回りである。土気は
低い。外壁から外への監視ならばもう少しやる気があるのだろうが、
まず問題など起きない内部の見回りなど、面倒以外の何物でもない。

「……あれ、まだやってんのか、整備の奴ら」

普通なら見回りというのは二人一組で動くのが通例なのだが、こ
こではそれさえも守られていない。手間を減らす、という名目で一
人ずつで巡回しているのだ。

その最中、その兵士は灯りが点いている施設を見上げた。そこは
戦車などが格納されている場所で、整備の者たちが本領を發揮する
場所だ。

遅くまでご苦労なことで、と兵士は思いながらも、その建物へ近
付いていく。時間が時間である以上、一応確認をしなければならな

い。知り合いもいるし。

だから、と兵士は軽い気持ちで扉を開け、中に入った。大扉ではなく、人の出入り用の扉だ。

「お疲れ」

さん、という言葉は、告げることができなかった。

兵士が目にしたのは 朱。

整備班の者たちが、床に血をぶちまけ、死んでいる姿だった。

「あ………」

思考が、一瞬でフリーズする。理解の追いつかない事実が、思考を止めた。しかし、それとは別に、高速で動く思考もまた、存在する。

だが、それは。

思考の停止を、ただただ加速させるだけのものでもある。

死。

その一文字しか、感じられない。

「ひ、あっ………?」

悲鳴が漏れたのは、僥倖か、それとも、否か。
いずれにせよ、兵士は、そこで思考を取り戻す。

「ッ!」

だが、悲鳴を上げることは許されなかった。

兵士の体が、ゆっくりと傾く。同時に、その首から、凄まじい量の血が噴き出した。

その背後、一人の男が立っている。灰色の瞳と金髪を要する、壮年の男だ。年の頃は30半ばといったところだろう。

「……さて」

手にナイフを持ち、壮絶なまでの量の返り血を浴びたその男は。

「レオンの指示通り、狼煙を上げようか」

惨劇を生み出した男は、そう言う。

その視線を、目の前で沈黙する一台の戦車へと向ける。

直後、格納庫の扉が、轟音と共に吹き飛んだ。

響き渡る轟音に、ここ、エスリア基地司令 ラット・ケインズ
中佐は身を震わせた。何事だ、と声を荒げる。

「一体何の騒ぎだ!？」

「報告します!！」

叫ぶとほぼ同時に、ラットの私室に殴り込むように彼の副官が入

つてきた。普段なら不敬にあたる行為だが、今は緊急事態だ。いちいち咎める意味はない。

副官は手元の資料を見ながら、切羽詰まった表情で告げる。

「襲撃です！！ 一番格納庫にて爆発！！ 戦車を奪われました！
！ 同時に、二番、三番格納庫でも爆発を確認！！ こちらは内部に用意されていた兵器を全て破壊された模様！！」

報告に、ラットはギリツ、と歯軋りをした。素早く軍服を羽織ると、彼は怒鳴るように副官へと問いかける。

「下手人は！？」

「確定情報ではありませんが……おそらく、フェンリル《氷狼》かと……」

どこことなく、戸惑いを含んだ言葉。ラットは、より一層強く歯を食い縛った。

（あの貴族の小娘の言う通りだったと……！？）

思い出すのは、今朝方、伝令として部下を一人連れてここへ来た女性士官だ。彼女はこちらを見るなり、形だけの敬意を払ってこう告げたのだ。

《氷狼》という義賊集団に気を付けろ、と。

何を馬鹿な、と、ラットもその副官も笑った。《氷狼》とある事情から確かに厄介な集団だが、ここにはそれを退けるだけの戦力は整っている。更に、前回の奴らの行動は、ここから随分と離れた場所だった。故に、その忠告を笑って受け流したのだが

「忌々しい……戦況は？」

「はっ、兵たちを向かわせていますが、何分、向こうはこちらの戦

車を奪っておりませす。破壊には相応の被害が出るかと」

副官が頷く。ラットは頷いた。戦車は、？神将騎？を除けば、現代の人類が辿り着いた技術の結晶だ。その力は何よりも、耐久力にある。歩兵用の武器では、使い捨てのランチャーでようやく傷がつけられるくらいだ。

そして、こちらの戦車は行動不能にされているという。状況は、随分と切迫している。

故に、ラットは一つの決断を下した。

「ゴウレム を用意しろ。 私が出る」

はっ、と、彼の副官が応じ、駆け出していく。それを見送ってから、ラットは、自室の外で瞬く光を睨み付けるように凝視した。

そして、吐き捨てるように口にする。

「賊が。見せてやろう、大戦時代、エースと呼ばれたこの私の力を……！」

戦車の操縦をしながら、レイド・ノーティスは舌打ちを零した。彼が乗った戦車は、EU製のもの。大戦時代に彼が乗っていたシベリア製のものとは無論、勝手が違うとは思っていたが

「……対人用の兵器はないのか！！」

少し長めの金色の髪を揺らしながら、引き金を引く。吐き出され

るのは、砲弾。

圧倒的な威力の一撃が、敵の部隊が身を隠している防壁を打ち砕いた。土囊で造られた即席の壁など、正直、敵ではない。それごと吹き飛ばせる。しかし。

「今だ、放て　ッ!！」

「ッ、ちいッ!！」

舌打ちを零す。それと同時に、車体を凄まじい衝撃が襲った。ラ
ンチャーの一撃だ。

戦車の一撃は、確かに強い。だが、今は砲撃よりも対人用の榴弾などが必要な場面だ。一発一発の威力が大きい分、通常の砲撃は次弾装填までに時間がかかり、更に、一撃が大き過ぎるために効率が悪い。

車体が揺れる。レイドは、このっ、と、全力で戦車の軌道を変えた。

「吹き飛ばべ!！」

同時、砲撃を行う。その衝撃を利用し、大きく後退。建物の陰に姿を隠す。いくら戦車の装甲が頑丈とて、何発も喰らえば吹き飛ばぶ。更に言えば、砲門がやられればこちらの詰みだ。

どうするか、と、一度大きく息を吐いたレイドが呟く。それを待っていたかのように、レイドが胸元に装備していた無線から通信が届いた。

『こちら二番、首尾はどうですか?』

「見ての通りだ、坊主。　どうする?」

『作戦続行です』

返ってきた返答は、とても簡単なものだった。レイドは、へっ、と言葉を漏らす。

「そっちは大丈夫なのかい？」

『……まあ、空腹で今にも倒れそうですが、概ね大丈夫ですよ。四番と共に、今は馬鹿を待っています』

「馬鹿、ね」

レイドは苦笑を漏らした。馬鹿。自分たち、《氷狼》の中で一番真っ直ぐで、同時に、だからこそ危なっかしい男。彼は、この作戦をどう思うのか。

(仕方ない、で納得するようなタマでもないしな)

実際、この作戦についても真っ先に反対したのはあの男だった。だが、少数戦力である自分たちが、基地一つを襲撃しようというのだ。当然、相応の覚悟を決める必要がある。

その覚悟の一つが、死ぬ覚悟だ。

ギリギリの綱渡り。それをしなければ、何一つことを為すことはできない。それを、レイドも通信の相手も理解している。馬鹿も理解はしているが、納得はしていない。

だが、まあ。

それでいいのだろうと、レイドは思うのだ。

あの日、雨の中で。

ポロポロの体で、他人に手を差し出すような余裕などない中で。それでも、手を差し出すような馬鹿だから。

レイドは微笑を漏らしつつ、呟く。

「まあ、いいぞ。……一番よ、この後は？」

『あれ』が出ると同時に、門を破ってください。同時に撤退です。後詰めは、馬鹿が』

「了解だ」

頷く。すると、不意に銃撃が止んだ。

何だ、と、レイドが眉をひそめる。だが、答えはすぐに来た。

灰色の瞳が映す視界の先、そこに、答えがある。

全長、四メートル程の巨人が、その巨体に相応しい巨大なアサルトライフルを構え、立っていた。

丸い、と、レイドはその機体を見た瞬間、そんな印象を抱いた。

関節部が丸く、両肩も球体型に膨らんでいる。両掌と、地面を踏み締める足こそ人のそれに近いが、顔までもが球体のそれは、どことなく鈍重な印象を受ける。

だが、レイドは油断など一切、していなかった。額から一筋の汗を流しつつ、舌打ちを零す。

「出やがったな……？ 神将騎？」

？ 神将騎？ かつて、黎明の時代。人が辿り着いたという究極の力とされるそれは、古代遺産であると同時に、現代最強の兵器であ

る。

初めて発見されたのがいつかはわかっていない。だが、数十年の前より見つかったそれらは、装甲こそ劣化していたものの、兵器としては実働した。曰く、史上初めて？神将騎？に乗った男は、こう口にしたらしい。

？まるで、私たちを待っていたかのようだ？

この後、軍事に利用できると判断された？神将騎？は危険視されるようになり、男は暗殺される。

そして、そのほぼ直後から、世界各地の遺跡から一々数十という単位で？神将騎？が発見されるようになった。しかし、そこへ問題が生じる。？神将騎？は、誰にでも扱えるものではなかったのだ。

？奏者？と呼ばれる者がいる。統計的な確立にして、一人一人に一人、それが？神将騎？を操縦することが許される者だ。どういう基準か、？神将騎？は乗り手を選ぶ。そして選ばれた者こそが？奏者？だ。

現代最強の兵器　それを従える者、？奏者？。

その者たちが戦場を左右するという事実は、覆しようのない事実である。

「　チツ！！」

吐き捨てるように激しい舌打ちを零すと同時、レイドは動いていた。凄まじい音を立て、戦車のキャタピラが動き出す。後方へ全速力で退避しながら、砲撃を放つ。

轟音。

放たれた砲弾は、直撃のコースだった。だが、敵の？神将騎？は

大きく横へと飛びずさると、容易く躲した。レイドは、これだよ、と、小さく唸る。

「ふざけた機動性だ……！ 冗談抜きで次元が違う！」

文字通り、巨大な人が動いているようなものだ。理不尽この上ない。人の拳動を、四メートルオーバーの巨人がこなすというのだから。しかも、鉄の装甲を付けているせいで、簡単に突破できないと来た。

これは、本当に……！

厄介だ、と、レイドが思うと共に、反撃が来た。敵が手に持つアサルトライフル。それが、火を噴く。

ッ！！

凄まじい音が響き、車体が大きく揺れる。人の銃ならば容易に跳ね返す戦車も、？ 神将騎？のそれとなるとそう単純にはいかない。そもそもその口径が違うのだ。単純計算で四倍以上。最早その威力は、バズーカのそれに勝るとも劣らないものとなっている。

揺れる車体。音と衝撃、感覚を経験が計算し、答えを伝えてくる。

装甲が吹き飛ぶ……！！

かもしれない、などという浅はかな希望的観測はなしだ。破られる。戦車の砲撃は、確かに？ 神将騎？の装甲を吹き飛ばす。しかし、それは当たればの話であり、今の彼には当てることさえ困難である。故に、レイドは牽制のための一撃を放とうと引き金を引いた。当たらずとも、少しでも相手の動きを止められればと。当然だ。

「　　ッ!?!」

前方の視界が、一瞬、途絶えた。

視界が白に染まる。体に、凄まじい衝撃が叩き込まれた。何だ、
と思うと同時に、レイドは感覚で理解していた。　　暴発だ。

おそらく、敵のアサルトライフルの射撃により、砲門が歪んだの
だろう。砲撃が暴発したために、戦車の前方部分が吹き飛んだのだ。
くっ、と、無理矢理に目を開き、レイドは前を見た。負傷はある
が、それよりも、今前を見なければ殺される。

「くそ、がっ」

睨み付けるように前を見る。だが、敵はこちらに容赦をする気は
ないらしい。一切の躊躇もなく、銃口をこちらに向け、引き金を引
こうとしている。

くそっ、と、もう一度、レイドが呟いて
アサルトライフルから、弾丸が放たれた。

しかし。

その銃弾は、彼には届かない。

銃声と共に、地面を揺らす、何かが着地した音が響いた。

銃弾の着弾の音が響く。しかし、それは穿つ音ではなく、防がれ
る音。

『　　すまねえ、おっさん。少し遅れた』

外部スピーカーで聞こえてきたのは、そんな声だった。レイドは、
はっ、と息を吐く。

「遅いぞ、坊主」

ゴウレムのパイロットであり、？奏者？であるラットは、眉をひそめた。彼の視線の先には、一機の？神将騎？がいる。

青で塗装された機体だ。脚部が細く、両腕も標準のものに比べて随分と細い。

全体的に細いフォルムをしたそれは、その頭部をこちらへ向けてきた。右と左、両手にそれぞれ有しているのは、両刃の剣と盾だ。ラットは、ふん、と鼻を鳴らした。

「フェンリル だったか。くだらんな。銃の一つも持たず、盾と剣だけだと？ 騎士でも気取るつもりか」

そして、ゴウレムが跳ねた。見たところ、相手の武装に銃火器はない。ならば、距離を取って追い詰めればいい。盾があるうと撃ち抜くことは可能だ。

そう思い、後退しながらアサルトライフルの引き金を引く。？神将騎？の刃としては標準のそれであるため、過度な破壊力は求められないが、構いはしない。

「ここをこれほどまでに粉碎した礼を、させてもらおうぞ！！」

引き金を引く。引き続ける。対し、フェンリルは横っ飛びをし、射線から離れた。

逃がすか、と、ラットは銃口の向きを変えていく。そうしながら、

ラットは外部へのスピーカーを開き、吠えるように言葉を紡いだ。

「敗戦国の亡霊が……！ いい加減に認める！ 貴様らは負けたのだ！ 敗北者の末路などそんなものだ！ 何故それを理解しない！？」

「誰が負けたんだよ」

応答が返ってくるとは思わなかったため、ラットは一瞬、虚を突かれた。だが、牽制の銃撃のせいで相手は近付けない。このまま追いつめていけばいずれ詰める、と判断する。

「勝手に始められた戦争で、勝手に負けたと言い渡されて……納得できるわけがねえだろうが！！」

「納得も何もない！ 世界が認めたのだ！ 貴様らは負けたとな！！」

「負けてなんかいねえ！！ 俺は今も、こうして戦ってる！！」

吠える声。ラットは、ふん、と鼻を鳴らした。

いくら吠えようが、結局変わりはない。事実、追い詰められているのは向こう。そして、敗戦したのもだ。

故に、亡霊が、とラットは呟いた。

「ならばここで散れ、亡霊！ 亡国の餓狼など、笑い話にもならん！！」

引き金を絞る。そこで、弾丸が尽きた。ゴウレム は手慣れた動作で弾倉を交換すると、すぐさま射撃体勢に入る。

破砕音。相手が持つ盾に亀裂が走ったのだ。ラットは、吐き捨てるように言った。

「騎士の真似事か。どこまでも亡霊だな。銃の出現により、騎士の時代も侍の時代も終わったのだよ！」

かつて、騎士と侍という存在が勇名を馳せた時代があった。しかし、鉄砲という存在がそれを否定し、今の時代においては騎士も侍も滅びている。

だというのに、目の前の敵は、盾と剣のみを手に、こちらへ向かってきている。

まるで、騎士のように。

ラットは、舌打ちを零した。騎士 『精霊王国イギリス』の出身である彼にしてみれば、酷く癩に障る存在だ。最早廃止された、崇拜に近い憧れを抱かれる偶像。

戦場で骨身を削るのは自分たちであるというのに、今も尚、騎士という存在が重要視されている。

実に 腹立たしい。

故に。

「消える、亡霊！」

ラットが叫び、その銃撃が フェンリル の盾を砕いていく。殺った、と思った。確信に近い想い。

しかし。

「!?」

不意に、自身が放っていた銃弾の雨が止んだ。同時、衝撃により、機体が揺れる。

右腕 そこに持っていたアサルトライフルに、 フェンリル が手にしていた剣が突き刺さっていた。

投擲、と理解すると同時、その脚力をフルに使った跳躍が行われる。今の今までずっと堪えていたのか　そう思うほどの、跳躍だった。

蒼き巨人が、距離を縮めてくる。その右手は、まるで獣のそれであるかのように鋭利な爪を持っていた。

『消えるのは、テメエらだよ』

装甲さえも貫くであろう爪が迫る。死。それを覚悟した瞬間、こんな言葉が聞こえた。

『ここは、あいつの国だ。……テメエの国に、帰りやがれ』

直後、腹部を貫かれた　ゴウレム　が、爆散した。

爆炎が立ち上り、自分たちの基地に唯一存在していた？神将騎の敗北で混乱している基地の中を、一人の青年が少女と共に歩いていた。来ていた作業衣の前を開け、楽そうな格好になりながら、青年は呟く。

「とりあえず、今回も無事に完了か」

「お疲れ様」

ため息のようなものを零す彼の隣で微笑むのは、一人の少女だ。

青年　レオン・ファンは、ああ、と頷く。

「レベッカもよくやってくれた。……礼を言う」
「いいよ、別に。でも、これで良かったんだよね？」

少女……レベッカ・アーノルドは振り返りながらそう言った。レオンは、ああ、と頷く。

「もう、犠牲を出さない方法などと悠長なことを言っていていられなくなった。俺たちは少数だ。打てる手はすべて打たなければならぬ。あの馬鹿も、それは理解しているはずだ」

見上げるのは、まるで血のように右腕から黒い液体をたらし、天を見上げている？神将騎？の姿だ。

人を殺しながらも、それでも、甘いことばかりを口にする男。

約束、と、あの男はまるで自分を奮い立たせるようにいつも呟く。それがどういったものかはわからない。ただ、願わくば。

「死ぬにしても、生きるにしても。笑っていられば、いいんだがな」

護は、大きく息を吐いた。そうしてから、掌を見つめる。
……震えている。

戦闘中には、欠片も見せなかった反応だ。人を殺すこと。今更、それに怯えているというのか。

「……馬鹿野郎」

護は、吐息のように呟いた。同時に フェンリル を操作し、来た時に破壊した門を通して外へ出る。そうしながら、彼は呟いた。

「なあ、アリス……俺は ……」

力なく紡がれた言葉は。

最後まで紡がれることはなく、宙に溶けて消え失せた。

交わした約束は、まだ、果たせていない。

第一話 氷狼 フェンリル（後書き）

というわけで、連続投稿です。

今回登場したキャラクターの一人、カルリーネ・シュトレンというキャラクターは、アヴェンジャー先生に考えていただきました。

口調などは弄っていますが、他はほとんどそのままです。

アヴェンジャー先生、ありがとうございます。

さてさて、始めましたこの連載。第五話までは文字通りかつ飛ばして全速力に突き進みます。それが序幕となりますので。

今後、他の先生たちに考えて頂いたキャラクターも随時出していきます。

では、今回はここまでで。

感想くださるとうれしいです。

ではでは

第二話 再会は、幸か不幸か

シベリア連邦首都、モスクワ。

かつてはシベリアの王族が住み、極寒の地でありながらも賑わっていた都市だ。

しかし、二年前 シベリア連邦の敗戦の際、最後の決戦の場となったこの都市はその後、統治軍の本部が置かれ、活気と呼べるものがほとんど消えていた。

街の中心部にいるのは、精霊王国イギリスの軍隊を中心とした統治軍の者たちや、他国の人間。

砕かれた外壁の側、身を寄せ合うようにして『スラム』という場所で暮らすのは、シベリア人たち。

この二つの明確な格差。それが、全ての現状を物語っていた。

「……相変わらず、ここは変わらねえな」

スラム街 シベリア連邦の人間でありながら、首都を追われた者たち。敗戦国の人間という弱い立場に追いやられながらも、身を寄せ合って生きる彼らの居場所だ。

立ち並ぶ家屋のうち、一軒の家屋から姿を現した護は、吐息のよくな小さな声で呟いた。

かつて、ここで過ごした日々。戦争が始まる前も、始まった後も。ずっと、ここは……

「生まれ故郷に帰ってきて、感慨深いか？」
「……レオン」

振り返った先にいるのは、金髪の青年だった。レオン・ファン。二年前に出会い、あまりにも無謀な戦いを敢行しようとしていた護に道を付けてくれた男だ。

そのレオンは、まあ、と前置きを付けてから言葉を続ける。

「この状況を見て感慨深いと思うようなら、精神がどうかしている。

……怒りか、護

「……うるせえ」

「俺に八つ当たりをされても困る」

レオンは、ふう、と息を吐いた。

「とりあえず、ここで事を起こすつもりはない。早まるなよ、護」

「わかってる」

「なら、いい」

言って、レオンは護に背を向けて歩き出そうとする。そのレオンに、護が問いかけた。

「どこへ行く気だ？」

「ちょっとな。ここで落ち合う予定の奴から連絡がない。調べてくる」

「……俺にできることはあるか？」

「今のところは、とりあえず休んでおけ」

笑いながら言うレオンに対し、護は頷く。レオンはこちらへ背を向けたままに手を振ると、そのまま歩き出した。対し、護は逆方向

へ歩き出す。

瞬間。

「あーっ、マメル兄ちゃんだー!!」

「ホントだ！ お兄ちゃんだー!!」

「お兄ちゃん、お帰りなさいー!!」

言葉と共に、護の視線の先にいた子供たちが飛びついてきた。皆、年の頃は十を下回るくらいだ。

「おっつ!?!」

いきなり抱きつかれ　　というか、腹部に打撃を受けた　　衝撃
で護はよろける。だが耐えた。しかし。

「わーい」

追加の波状攻撃が更に入り、結果、護は地面に倒れる。どさっ、
という音と共に、背中から雪の積もった地面へと。
……物凄く冷たかった。

「いつつ……おいコラ、人に飛びつくんじゃないわねえ。危ねーだろうが」

「遊ぼうー!!」

「遊ぼうよー!!」

「遊んでー!!」

「聞いちゃいねえ……」

体に抱きついた状態で、口々に言う子供たち。護は深くため息を吐いた。

初めてここに入った時、子供たちは愚かここにいる全員に護は警

戒された。ハーフとはいえ、彼の身体的な特徴はシベリア人のそれではない。外国の出身である父親のそれに近いのだ。

そう　大日本帝国。世界最強国に住む人間のそれに。

「お兄ちゃん、今度はいつまでここにいれるの？」

無邪気な声。護は。そーだな、と呟いた。

紆余曲折あり、今、護はここで受け入れられている。それについては色々と思うことがあるが、まあ、今は置いておこうと思う。

「どれくらいいられるかは、レオン次第だな。俺たちの方針はあいつが決めてるから」

身を起こし、立ち上がると、護は子供たちと同じ目線になるように膝を折りながら言う。男の子の一人が、えー、と声を漏らした。

「マモルお兄ちゃんがリーダーなんじゃないの？」

「俺がリーダー？　あー、それはない。うん。ねえな。リーダーはレオンだよ」

「でも、レオンお兄ちゃんはマモルお兄ちゃんが『えーす』だって言ってたよ？」

「そんなこと言ってたのか、あいつ」

護は苦笑を零す。レオン・ファン。護たち義賊集団…… たった五人しかいない《氷狼》という一団のリーダーは間違いなくレオンだ。あの男が作戦を立案し、あの男も含めたメンバー全員で事に当たる。その中で、？奏者？でもあり、唯一？神将騎？を扱える護を主軸に置いた作戦が立てられるのはいつものことだ。だが、だからといってエースというわけではない。

「俺はエースじゃねー。そんな大層なもんじゃないよ」
「でも、マメルお兄ちゃんは強いんでしょ？」

どうだろうな、という言葉が口から出そうになった。だが、こちらを見ている子供たちの目を見、護はその言葉を呑み込む。代わりに。

「少なくとも、お前たちを守れるくらいの力はあるつもりだ」

頭を撫でつつ、そう言った。子供たちが、うん、と嬉しそうに頷く。

「とりあえず、俺は今から行くところがあるから、そのあとで遊んでやる。いいな？」

「え〜？」

「えー、じゃねえ。……そんなに遊んでほしいなら、レベッカにでも頼んどけ。じゃあな」

言って、護は子供たちに背を向ける。そうしてから、白い吐息と共に空を見上げた。

「灰色の空、か」

それは、あの日。
戦うと決めた日と、同じ色をしていた。

スラムの片隅にある廃屋。明かりのついていないその部屋に、三つの影があった。そのうち、一つの影が言葉を紡ぐ。

「……それで、レオン。あいつとは連絡が取れたか？」

声を上げたのは、レイド・ノーティスだ。《氷狼》の中では最も年長であると同時に経験も豊富な彼は、視線の先にいる青年　レオン・ファンに問いかける。レオンは頷いた。

「合流場所に行ったが、姿がなかった。痕跡の一つもない」

「失踪したか？」

「……いや、もっと最悪の展開かもしれない」

言つて、レオンは視線を今まで沈黙していた三人目に向けた。そこに立っているのは、足下に大きなバツクバツクを降ろした状態の女性だ。左目に眼帯を着け、濃紺の髪を後ろで結った女性は、促されるように言葉を紡ぐ。

「ここ数日、統治軍に動きがあるね。本国の方からの増援って話だけど、その増援のほとんどは首都以外へ派遣されてるらしいから、こここの戦力は前とそんなに変わらないだろうね」

「……レオン、この女は？」

「アタシかい？　そうだね、ただの通りすがりの旅人だよ」

女性はそう言うと、微笑を漏らした。レオンは肩を竦め、言葉を紡ぐ。

「アルビナさんだ。以前世話になって以来、時々こうして情報をもたらしている。世界各地を旅してるおかげで、色々と情報に詳しいから助けられてる」

「それはお互い様。アタシとしても、この国を自由に動くのに事情を知ってる奴がいた方が助かるからね」

アルビナ、という女性は微笑を崩さないままにそう言葉を続ける。レオンは、話を戻そう、と言葉を紡いだ。

「統治軍に動きがあるのは確かだ。その確認のために首都に戻ってきたが、以前来た時とはかなり変わっている」

「変わってる？」

「ああ。……空気が重い。張り詰めている、と言った方がいいかもしれない。だが、心当たりがない。一体、ここで何が起きている？」

わからない、と、レオンは呟いた。

「本国からの増援自体は別におかしくはない。俺たちみたいなのがいるというのが現状だから。だが、アルビナさんの話と俺が調べた情報で出てきた増援の規模が、明らかに道理に合わない」

「道理に合わないってのは？」

「規模が大き過ぎるさね」

言いつつ、アルビナは紙片を取り出し、机の上に広げた。同時に、レオンが蝋燭に火を点ける。スラムに電灯などという気の利いたものは存在しない。

その紙片の情報を見つめながら、レオンは疑問符を浮かべた。

「二個連隊……新しい将軍が来るという話は前々からあったが、この規模はいくらなんでも大き過ぎる。何故、今更この国にこれだけの規模の軍隊を派遣する？」

「反抗を恐れるとかじゃないのか？」

「俺たち以外、戦える奴なんていないの？」

レオンの言葉に、レイドは口をつぐんだ。そう、この国には現状、レオンたち《氷狼》以外に戦っている者たちはいない。いや、正確には戦える者がいないのだ。何故なら。

「……シベリア軍の軍人たちは収容所送り。そうでなくても、十五歳以上の男は強制労働。俺たちは運よく逃れたが、そうでない者たちは今も苦しんでいる」

そう、元軍人は終戦後、各地に作られた収容所へと送り込まれた。また、十五歳以上の所謂一般人も、各地で強制労働に従事させられている。

これは叛乱の抑制だ。スラムに女子供と老人しかいないのもそれが理由である。この国には、戦える力がないのだ。

「確かに、俺たちは神将騎を一機持っているし、護という奏者もいる。だが、それだけだ。それだけの一団を相手に国という組織が連隊を派遣するわけがない」

「治安維持の強化は？」

「元々反抗する基盤を砕かれている。俺たち以外、向こうにとっての問題はないのが現状だ」

反抗しようにも、そのための力がないのだ。クーデター、叛乱、革命……その全ての裏には、武力という確かな力が存在している。しかし、この国にはそれを所持することさえも許されていない。そうだな、と、レオンは目を伏せ、言葉を紡いだ。

「あるいは、向こうに問題が発生したか」

「問題？」

「ああ。……噂話の類と思っていたが、現実味を帯びてきたな」

噂話、と、レオンはもう一度呟いた。それを引き受けるようにアルビナが言葉を紡ぐ。

「反乱軍……それも、王女様を旗印にした軍隊だったね？」

「敗戦直後、王族は全員が第一級戦犯として処刑された。それは俺も見ている。……酷いものだった」

レオンは、苦虫噛み潰したような表情を作る。敗戦直後、これから何が起ころのかを予見していたレオンはすぐさま混乱する首都を去ろうとした。その時に、見たのだ。

この国を導いてきた王族と宰相の首が、落とされるのを。

「……敗戦国の指導者の末路は悲惨だ。よくて永久拘束、普通なら死罪。だが、あれはいくらなんでもやり過ぎだろう」

「そうさね……やったのは、大日本帝国の侍だったかね？」

アルビナの言葉に、レオンは頷く。処刑の日、王族と宰相の首を落としたのは大戦における最大の戦勝国、大日本帝国の女侍だった。今も、レオンは覚えている。酷く冷たい、冷淡な瞳。

「別に、恨むわけじゃない。落とした首は供養されたという話だ。

だが、衆人環視の中でそれを行うことが、俺には理解できない」

「あれは、あの国の美学さね」

言ったのは、アルビナだ。アルビナは、更に言葉を続ける。

「元々、あの国のクーデターから始まった世界大戦……それについては何も言っていないけど、責任は感じてたはずだよ。そうでなければ」

ば、人としておかしいさね。だからこそ、自分たちの手で終止符を打ちに来たんだらうさ」

「処刑もか？」

レイドの問いかけ。元軍人であり、王族を敬う立場にあった彼には、処刑は許せないものだったのだろう。

アルビナは、そうさね、と言葉を紡いだ。

「レオン、王族と宰相は足掻いたかい？」

「いや、受け入れていた。恐怖の表情さえ浮かべずに、首を落とされたよ」

「なら、そういうことさね」

言い切るアルビナ。どうということだ、というレイドの問いに、アルビナは頷いた。

「誇りある最期を……あの国の人間がよく口にする言葉さね。死の瞬間、みつともなく抗うわけではなく、戦争を終わらせるために潔く命を絶った王族。これ以上ない、誇りある最期さね。それをこの国の人間のうち、どれだけが受け入れてるのは知らないけどね」

「……理解できん」

「ま、そうだろうね。他国の文化なんて、真髄まで理解できやしないよ」

くくつ、と笑うアルビナ。レオンが、話を戻すぞ、と言葉を紡いだ。

「反乱軍については眉唾も多かった。だから俺は今回もそうだと判断したわけだが、統治軍の動きを見るからにどうやら真実らしい」

「とどうと？」

「二日前、一個連隊が東部へと出立したさね」

ふう、と、息を吐きつつアルビナが言った。レオンが頷く。

「一個連隊、そこまでの戦力を何の確証もなく動かす指揮官はいない。いたとしたらそれはただの阿呆だ。統治軍の主体は精霊王国イギリスの軍隊だ。あの国は貴族政だが、女王エリザベスが相当キレる。その手腕は前大戦で十分に証明されているな。その女王が、こへ無能者を送るとは思えない」

「そうさねえ……確か、統治軍の頭やつてる貴族のウィリアム・ロバートは徹底的な貴族主義者って話だけど、アルテア海戦を仕切つてイギリスの勝利を導いた男だつて話だからねえ」

「いつそ無能な奴が来てくれれば、どれだけ楽だったか」

レオンは肩を竦める。軍の指揮を執っている将軍も厄介だし、本当にやりにくい。

「で、その厄介なトップが一個連隊をどうして東部に？ あそこは

「アルツフェムの虐殺」

レイドの言葉を遮り、レオンは静かに口にした。アルビナとレイドが押し黙る。レオンが言葉を続けた。

「シベリア連邦東部最大の都市。前大戦で最大の激戦区になったそこへ、突如大日本帝国の神将騎二機を筆頭とした部隊が現れ、イタリア、フランス、シベリアの部隊及び民間人を塵にした。……それ以来、あそこには誰も近付いていないはずだが……」

「叛乱軍の噂が立っているのは、そこさね」

アルビナは、もう一枚、新たな紙を取り出す。シベリア連邦の地図だ。その広大な国土のうち、東部の一点に記された赤印。アルビナはそれを指で示し、言葉を紡ぐ。

「真偽は定かじやない。けれど、動いているのは事実。さて、あんたたちはどうするさね？」

問いかけ。それに対し、二人は無言を通した。それを受け、アルビナは口元に笑みを刻む。そうしてから、彼女はバックパックを持ち上げ、二人に背を向けた。

「それじゃ、あたしは失礼するさね。それは饞別、お近付きの印としておこうか」

「今度は、どちらへ？」

「ここじゃない、どこかへ」

笑みを零すアルビナ。そのまま彼女は二人に背を向けると、言葉を残した。

「厄介事は御免だね。あんたたちも、程々にしときなよ」

「心得ている。またいずれ」

「互いに命があればねえ、と」

アルビナが去っていく。それを見送ってから、レオンは紙片を手にとった。そして、そこへ描かれている情報を見て、眉をひそめる。

「……レイドさん」

「何だ？」

「俺たちは、一年以上戦ってきました。生き残ってこれたのは、護とレイドさん、あなたの経験のおかげだと思っています」

「いきなりどうした？」

レイドが眉をひそめる。レオンは、真剣な表情で問いかけた。

「《赤獅子》に勝つ方法、心当たりがありますか？」

その問いかけの後、流れたのは、沈黙だった。

数秒、あるいは数分か。それが流れた後、レイドが静かに言葉を紡いだ。

「先日の基地襲撃もそうだが、お前は、いつだって勝ち目が薄い戦いに勝機を見出してきただろうが。違うか？」

「そうだといいんですが、ね」

ふう、と息を吐くレオン。レイドは鼻を鳴らすと、それで、と問いかけた。

「レベツカはどうした？」

「地下で フェンリル とあれの整備をしています。休め、とは言ったのですが」

「そうか」

頷くと、レイドは窓を開けた。冷たい外気が流れ込む。

「いつになれば、この国を変えられるんだろうな？」

その問いに、レオンは答えなかった。

答えられなかった。

吐く気が白い。冷たい外気に震える体は、熱を欲している。

ほう、と、両手に向かつて息を吐きかけた。吐息で手を温めるといのは、気休めのようなものだ。実際に温まるということとはほとんどない。

もう一度、息を吐いた。生まれた時からこの国にいるが、この寒さは未だに辛い。

「……………」

吐息を零しながら、少女　アリス・クラフトマンは空を見上げた。灰色の空は、今にも雪が降り出しそうだ。

白髪の長い髪と、灰色の瞳。そんな彼女は生粋のシベリア人である。そう、つまりは敗戦国の人間だ。それ故か、道を歩む彼女は歩道を通ることをせず、車道の隅を俯きながら歩いている。

統治軍によって統制され、本来の住民たちがスラムへと追いやられている首都モスクワ。その中心部は閑散としているかというところでもない。統治軍の兵士たちの家族や、利権を求める貴族たち他国からの人間が集まっており、賑わっている。

しかし、そこにシベリア人の姿はない。

それが、この国の現状だ。首都であるはずの都市の中心に、その国の人間がいない。敗戦国としてシベリアがどんな扱いを受けているかはこれで理解できるだろう。

道を行んでいく。アリス。それなりに賑わっているのに、彼女の周りにはまるで壁でもあるように誰もいない。いや、実際、壁があるのだ。

人種の壁。

勝者と敗者の壁。

彼女の歩みを遠巻きに見ている者たちは、誰もが眉をひそめている。その目は、明確に一つのことを告げていた。

『何故、シベリア人が歩いている？』

冷静に考えればおかしな台詞だが、これが現実だ。敗戦国の人間に、居場所などない。

「……………ッ」

歯を食い縛り、アリスは逃げるように いや、実際に路地裏へと逃げ込んだ。浅く息を吐きつつ、誰にも見られていないのを確認すると、その場にしゃがみ込む。

……………怖い。

アリスは、小さくそう呟いた。元々、人と距離を取ることが苦手だった。だからどうしても一歩引いてしまい、結果、独りになってしまう。友達と呼べる相手など、本当に数えるほどしかいなかった。そしてその友達とも、戦争のせいで引き裂かれて散り散りになり、独りになって。

家族というものを喪っていた彼女は、本当の意味で天涯孤独の身だった。

だが、彼女自身はそれでいいと思っていた。一人で生きていくことは難しい。だが、できないことではないとそう感じていたし、事実、そうしていた。

けれど、彼女は、出会ったのだ。

手を差し伸べてくれた、不器用だけど温かい、あの人に。

だから

「にゃあ」

不意に聞こえた鳴き声に、ビクリとアリスは体を震わせた。見ると、黒い体毛の子猫がこちらを見ている。

「あ、えっ、えっ」と

いきなりのことに、少々焦る。ポケットから何かないかと探るが、何もない。

だが、子猫はそんなこちらの気持ちを知ってか知らずか、すり寄ってきた。アリスは、そっか、と小さく呟く。

「キミも、一人なんだね」

抱き上げる。すると、すんなりと持ち上げさせてくれた。それどころかこちらの肩に上り、頬を摺り寄せてくる。

……温かい。

くすぐったさと同時に、そんなことを感じた。アリスは立ち上がると、子猫を肩に乗せたままに歩き出した。中心地とは逆方向。人が集まる場所へだ。

スラムと中心の境界線。暗黙のルールとして誰も住まうことがなく、結果、廃墟同然となっている場所。その一角に、彼女は足を踏み入れた。

「にゃあ」

「あっ」

不意に、肩の猫が飛び降りた。アリスは慌てて追うが、子猫とはいえ猫である。その速さは、人のそれより遙かに速い。

反射的に子猫を追う。しかし、すぐに見失ってしまった。

「……………」

吐息を零す。人のいない静かな世界に、その音は大きく響き渡った。

寒さに体を震わせながら、アリスは歩き出した。

数分後、彼女はその場所に辿り着く。

誰も住まないようになり、荒れてしまった市街地。その一角に、その小さな一軒家は存在していた。窓ガラスは全てなくなり、建物自体もかなり傷んでしまっている。

キィ、という音を立て、アリスは扉を開けた。入り込んだ先にあるのは、荒れた室内。

「……………」

ほう、と、もう一度吐息を零した。アリスは、この場所にいたとある少年のことを思い出す。

二年前まで、シベリア連邦は首都に座す王の下、地方の領主がそれぞれの領地を治めるといふ統治形式をとっていた。国土があまりにも広大であるためだ。しかし、二年前の戦争ではそれが災いした。各地を治める領主は、それぞれの軍隊というものを有していた。

そして戦争において一番被害をこうむったのは、EU連合。当時、戦争のために欧州諸国が作り上げた。と接している地域だ。戦争開始当初はシベリア連邦・中華帝国連合軍の優勢であったために、シベリアの領主たちも問題なく国のために戦っていた。

しかし、大日本帝国。大戦の発端となった極東の島国が参戦したことで、状況が大きく変わる。

帝の、一刻も早い世界の安寧を求めるといふ意志の下、彼らは中華帝国に進撃。瞬く間に戦況を動かすと、大戦の英雄たる藤堂玄十

郎のてによつて、中華帝国皇帝を、皇帝に反逆し、その身柄を拘束していた中華議会から奪取。中華帝国を制圧した。

そして、大日本帝国に初めから協力していた合衆国アメリカと、その推移を見て彼らの側についたEUを始めとする諸国に囲まれ、シベリア連邦は追い詰められていくことになった。

そして、最大の激戦となった『アルツフェムの虐殺』と呼ばれる戦いの後、各地の領主たちは勝手に降伏を始め、連合軍は一気に首都モスクワへと攻め込んでくることになる。その時、王族の下した決定は『徹底抗戦』。結果、アリスはそれによって徴兵を受け、二か月にも渡る泥沼の防衛戦に参加することになった。

ここは、戦場となった場所からかなり近い場所である。

徴兵され、右も左もわからない中で、使い方もわからない銃を握らされ、俯いているだけだった自分。そんな自分に、彼だけが、声をかけてくれたのだ。

「……こつちだよ」

アリスは、呟いた。

彼がくれた言葉を。

彼がいない、彼が生きていたはずの場所で。

ため息が零れた。もう何度目だろうか。

彼と交わした小さな約束だけを縁よすがに、こんなところで

……

「何をしている」

ビクッ、と、いきなりの声に体が震えた。反射的に振り向こうと

する。しかし。

「動くな」

カキン、という撃鉄を起こす音と共に発せられたその言葉のせいで、動きを封じられた。

停滞が生まれる。振り向くならば、声を聴いた一瞬しかチャンスはなかった。だが、それを潰されてしまった。

どうする、どうすれば、と、焦りだけが募っていく。その最中、背後に立つ人物が言葉を紡いだ。

「ここで、何をしていた。ここは、誰も住まない場所、シベリアの敗戦の象徴だろう?」

その言葉に何かが込められていると思ったのは、何故だろうか。アリスは両手を挙げ、反抗の意志がないことを示しながら、言葉を紡いだ。

「シベリア連邦の敗北は、どうでもいいです。いえ、どうでも良くはないですけど……それよりも、ここは、大切な場所なんです」
「大切な場所?」

言葉が返ってきた。アリスは、はい、と頷いた。

嘘を吐いてもいい。だが、吐く必要ないと彼女は思った。吐いても吐かずとも意味はない。関係ないのだから。

「約束をしました。世界を旅すると。ここは、その相手が暮らしていた場所です」

この国しか知らず、戦争のせいで他国が恐怖の対象にしか見えな

かった。

だからこそ、見たいと思い、知りたいと思った。他国はどんな場所なのかを。

「約、束」

不意に、呻くような声が聞こえた。気配でわかる。相手が、銃を降ろした。

だが、振り向かない。アリスは言葉を待つ。そして。

「その相手の名前は、護、か……？」

「……………ッ!？」

投げかけられた言葉に、アリスは驚愕と共に振り返った。視界に入るのは、光を背にした黒髪の青年。

その青年は、呆然とした瞳でこちらを見ながら、言葉を紡ぐ。

「アリス……？」

愕然。そして 静寂。

アリスは、紡がれた言葉に対して、返事ができなかった。しかし、青年はなおも言葉を続けてくる。

「アリス、なのか？」

言葉を返せない。

何故。

なんで。
どうして。

そんな、思考しているようで思考をしていない言葉だけが頭の中を駆け巡る。

まさか、と、アリスは思い。

しかし、すぐさま理性でそれを否定した。

期待してはいけない。そんなはずがないのだ。

頬を、温かい何かが伝った。

同時に、がくがくと体が震えた。

わけのわからない感情で。

整理できない思考で。

青年が、言葉を紡ぐ。

「聞かせてくれ。……その相手の名前は、何だ？」
「……護……、護・アストラード」

唇から、勝手に言葉が漏れた。涙が止まらない。

青年の 否、護の瞳からも、涙が溢れた。

「アリス！！」

青年は銃を放り捨てた。

「護さん！！」

少女は駆け出した。

飛びつくように地面を蹴った少女を。
青年が 抱き締めた。

互いに、強く、強く、相手を抱き締める。

互いから伝わる確かな温もりが。
今この瞬間こそが夢ではないという真実を教えてくれる。

二年前……二人は、小さな約束をした。

平和になったら。

世界を、一緒に見に行こう。

孤独な生活を強いられてきた二人。

故に出会うことができた二人が交わした、小さな約束。
信じていても、疑っていた。

生きているのかと。

もう、会えないのではないのかと。

軋んでいた心に、確かな、しかし、強い火が灯った

第二話 再会は、幸か不幸か（後書き）

というわけで、第二話です。

うむ、混沌としてきました。とりあえずは現状把握と、シベリア編においては主軸となる二人の再会と言うことでここはひとつ。

今回の新キャラ、伊狩・S・アルビナですが、フュージョニスト先生より頂いたキャラクターです。フュージョニスト先生、ありがとうございます。

さてさて、第五話まで爆走モード前回、勢い最優先で行くつもりです。詳しいものごとの説明はその場その場で行っているつもりですが、わからなければ感想なりメッセージなどください。

というわけで、お付き合いいただけただけで幸いです。感想などを頂けると嬉しいです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9950z/>

英雄譚 名も亡き墓標

2012年1月2日06時47分発行